

茨城県玉造町

井上廃寺跡

—県道山田玉造線歩道新設に伴う発掘調査報告—

1994

玉造町教育委員会

序

玉造町は東に行方台地、西に霞ヶ浦が広がり、古より山の幸と湖の幸に恵まれた環境の中で多くの人々が暮してきました。現在でもその人々の生活の痕跡として、貝塚や古墳・城館跡等の遺跡が町内に数多く点在しています。

また、『常陸国風上記』には、町の古代の様子を伝える数多くの記載が見られ、大昔からこの地で生活していた人たちの証となっています。私たちは、これらの文化遺産を一つでも多く後世に伝えて行かなければなりません。

しかしながら、これらの貴重な遺産である埋蔵文化財も、近年の大きな開発の波によって、その保護・保存が非常に困難になっております。

このような現状の中で、「井上廃寺跡」も古代寺院としての性格ばかりでなく、当時の行方地方を含め、この地方一帯の古代の様子を知るための考古学研究上の重要な文化遺産であります。この度の県道山田玉造線の歩行者道新設工事に伴い発掘調査による記録保存の止む無さに至りました。一部分ではありますが、その貴重な文化遺産を失うこととなり残念に思います。

しかしその反面、これまでにいくつかの瓦や土器などの遺物でしか、その存在を確かめることができなかった「井上廃寺跡」について、貴重な学術資料を残す結果につながったことは、意義深いことと捉らえることができます。

今後は、このような現実を見つめ、文化財の保護と活用の面で慎重に対処していかなければならぬと考えております。

最後になりましたが、この発掘調査に当たっては、茨城県鉢田土木事務所の深いご理解とご協力を賜りましたこと厚くお礼申し上げます。また、ご指導を賜りました茨城県教育庁文化課を始め関係各位の皆様、発掘調査を担当戴いた近江屋成陽先生並びに特段のご協力を賜りました地元の関係各位の皆様に心から厚く感謝申し上げ、ご挨拶いたします。

平成6年3月

玉造町教育委員会

教育長 島田 隆四郎

例　　言

1. 本書は県道山田玉造線歩道新設工事に伴う、茨城県玉造町大字井上字白幡1257-2番地他に所在する井上廃寺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は鉢田上木事務所から要請を受けた玉造町教育委員会の指導のもと山武考古学研究所が行った。
3. 調査期間は1994年3月7日より31日まで延べ18日間である。
4. 調査面積は、工事に係る400m²である。
5. 遺物整理及び報告書の作成は山武考古学研究所が行なった。
6. 本報告書の編集は近江屋成陽が行ない、伊藤順子、小沢美和子の協力を得た。
7. 本報告書の執筆の分担は以下の通りである。

第1章 小谷和弘

第2章～第5章 近江屋成陽

8. 調査に関わる遺物・図面・写真等の資料は玉造町中央公民館において保管されている。
9. 発掘調査及び本調査報告書作成に当たっては下記の諸氏、諸機関に御協力、御助言を賜りました。記して感謝の意を表します。なお、茨城県立歴史館職員の方々には多人なご協力を賜りました。

順不同、敬称略

阿久津久、黒沢彰哉、高塙栄治、茨城県教育庁文化課・茨城県教育財団・茨城県立歴史館・茨城県鉢田上木事務所・麻生警察署・（株）栗原建材・開成測量（株）・（株）東日本重機・新成田総合社・（株）地域文化財コンサルタント

10. 井上廃寺跡発掘調査は、下記のものが担当し実施した。

調査会長 成島謙二 玉造町文化財顕彰会長

事務局 岩田隆四郎 玉造町教育委員会教育長

　　真家幸司 玉造町教育委員会教育次長

　　池島正夫 玉造町教育委員会社会教育係長

　　小谷和弘 玉造町教育委員会社会教育主事

調査担当者 近江屋成陽 山武考古学研究所調査研究員

調査協力者 荒木田福子 大和田洋子 甲たき子 甲正枝 甲洋子 田中孝治 田中まつ枝 箱根寿大 箱根幾 箱根とみ子 原喜代子 藤岡きみ子 松沢義正

凡 例

1. 周辺遺跡分布図には国土地理院発行2万5千分の1の地形図「玉造」を使用した。
2. 掘図中に使用した北は座標北である。
3. 本遺跡の略称は93・I.Hである。
4. 各遺構の略称は以下の通りである。
溝・・・SD 土坑・・・SK 柱穴・・・P
5. 遺構・遺物実測図の縮尺は以下の通りである。
遺構配置図 1/200 溝・土坑 1/80 遺物 1/3
6. 掘図中のインレタは以下の通りである。
瓦・・・■ 須恵器・・・● 灰釉陶器・・・△
7. 遺物断面を黒塗りしたものは須恵器を示す。
8. 瓦の実測中（）に色調を記した。

抄 錄

フリガナ	イノウエハイジアトハックツチョウサホウクシヨ							
書名	井上廃寺跡発掘調査報告書							
発行者名	井上廃寺跡遺跡調査会							
所在地	〒311-35 茨城県行方郡玉造町甲404 玉造町教育委員会社会教育係							
編著者名	近江屋成陽 小谷和弘							
編集機関	山武考古学研究所							
所在地	〒286 千葉県成田市並木町221番地							
発行年月日	西暦1994年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いのうえはいじ 井上廃寺	いばらきけんなむかたぐん 茨城県行方郡 たまつくりまちおおあざいのうと 玉造町大字井上 あざくらはした 字白幡1257-2番 地他	08425	県番 1495 町番 3	36° 03' 47"	140° 26' 52"	1994 3.7 1994 3.31	400 m ²	県道 山田玉 造線歩 道新設 工事
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物				
井上廃寺	寺院跡	奈良 平安	溝 5条 土坑 11基	須恵器(甕、高台付き甕)、 灰釉陶器甕、平瓦、軒瓦、軒丸瓦				

目 次

序

例言

凡例

抄録

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第3章 遺跡の概観	4
第4章 調査の概要	5
第1節 調査の方法	5
第2節 基本土層	5
第5章 検出された遺構と遺物	9
第1節 遺構の概要	9
1. 土坑	9
2. 溝	11
第6章 まとめ	16

写真図版

欧文目次

挿 図 目 次

第1図 周辺の地形と遺跡	2
第2図 井上廃寺跡推定寺域図	4
第3図 標準堆積土層図	5
第4図 調査範囲図	6
第5図 遺構配置図	6
第6図 1～11号土坑・1～5号溝	折り込み
第7図 8号土坑・3号溝・4号溝出土遺物（1）	11
第8図 4号溝出土遺物（2）	11
第9図 4号溝出土遺物（3）	12
第10図 4号溝出土遺物（4）	14
第11図 4号溝出土遺物（5）	15

写真図版目次

- 図版 1 ① 井上廃寺跡寺域推定地現況 北西→
② 調査前現況 北東→
③ 発掘作業風景 西→
④ 同 北西→
⑤ 調査区西側全景 西→
⑥ 5号溝検出状況 東→
⑦ 3号溝・4号溝全景 北西→
⑧ 6・7・8号土坑 西→
- 図版 2 ① 1号土坑検出状況 南→
② 5号土坑検出状況 北→
③ 6号土坑検出状況 北→
④ 3号溝遺物出土状況 北→
⑤ 4号溝遺物出土状況 (A-6G) 北東→
⑥ 同 (A-5G) 北→
⑦ 4号溝検出状況 (A-5G) 北→
⑧ 同 (A-4G) 北→
- 図版 3 4号溝出土遺物 (1)
- 図版 4 4号溝出土遺物 (2)
- 図版 5 4号溝出土遺物 (3)

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

玉造町は、主要基幹道路である国道355号線と行方台地を走る主要地方道水戸神栖線が縦断し、これらを国道354号線等の道路により町を横断する形で接続している。

県道山田玉造線もこれに類して、国道355号線と主要地方道水戸神栖線を結ぶ主要道路として整備されてきた。この為、年々交通量も増加を続けており、通学路としても利用されていることから歩行者道の新設計画が出された。

今回の調査地である井上廃寺跡（県番号1495）もこの県道山田玉造線に近接して所在しており、歩道新設工事の事業主体者の茨城県鉢田土木事務所から平成2年8月27日付けで工事予定地内の埋蔵文化財の所在の有無およびその取り扱いについて玉造町教育委員会に照会が出された。

これを受け玉造町教育委員会は、工事予定地並びに周辺の踏査を行なった後、井上廃寺跡の遺跡の範囲に含まれている可能性が高いため、遺跡の確認のための試掘調査を実施した。

この調査の結果、井上廃寺の伽藍を画する堀と考えられる遺構や瓦片等の遺物が検出したため、当該地区の発掘調査を実施する旨、平成2年9月5日付け回答をした。

井上廃寺跡は、古代寺院として捉えられている性格上、特に麻生町大字行方に所在していたと伝えられる古代の郡衙跡とは密接な関係にあったと考えられ、玉造町のみならず行方郡・茨城県内の古代文化を知る上で重要な位置を占めている。また、この周辺には井上貝塚・戸ノ内貝塚や井上古墳群等の原始・古代を語る重要遺跡を始め、多くの埋蔵文化財が所在しており、古くから多くの人々が生活していたことを窺い知ることができる。

この為、玉造町教育委員会と茨城県鉢田土木事務所用地管理課、同道路維持課等と文化財保護・保存に関する事前の協議を数度にわたり実施した。また、この協議結果を受け茨城県教育庁文化課の指導の下に記録保存の措置を講ずることとなり、玉造町教育委員会が調査を実施することとなった。発掘調査に当たっては、玉造町遺跡調査会並びに山武考古学研究所の協力を得て、1994年2月25日から3月31日の期間で調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過

- 1994年 2月25日 プレハブ設置の借用地の草刈りを行う。発掘器材の準備を行なう。
- 3月1日 調査区に係る県道部分の道路使用許可申請を麻生警察署に提出する。
- 3月7日 道路使用許可の認可が降り本日より調査を開始する。安全対策の機材設置を行ない、農道を挟んだ東側の調査区より表土除去を行なう。
- 3月9日 引き続き、西側の調査区の表土除去を行なう。東側には遺構は検出されなかった。
} 並行して西側の調査区の遺構確認を行ない、土坑11基、溝5条を検出。調査を行ない、写真、図面に記録し、30日に終了する。
- 3月30日 埋め戻しを行ない、調査の全工程を終了する。

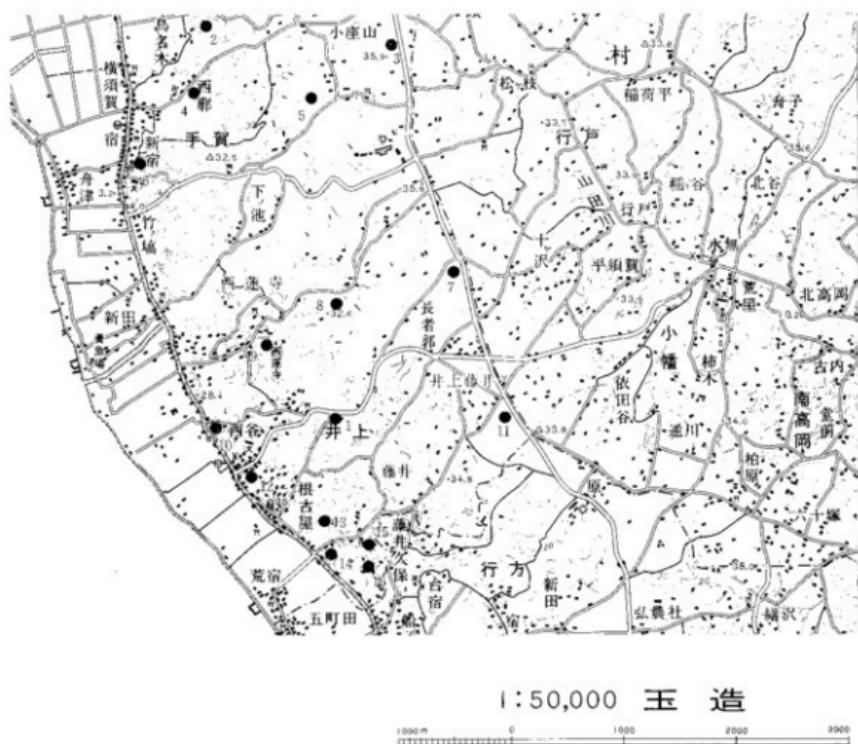


表1 歴史時代以降の周辺の遺跡

遺跡名	県番	町番	種別	時代
1 井上廃寺	1495	3	寺院跡	奈良・平安
2 鳥名木館跡	1504	12	城館跡	鎌倉・室町
3 手賀長者館跡	1516	23	城館跡	奈良・平安・鎌倉・室町
4 手賀城跡	1498	6	城館跡	鎌倉・室町
5 手賀廃寺跡	1494	2	寺院跡	奈良・平安
6 福荷館跡	5175	62	城館跡	鎌倉・室町
7 井上長者館跡	1517	24	城館跡	奈良・平安
8 戸羅度廃寺跡	1496	4	寺院跡	奈良・平安・鎌倉
9 小貫館跡	1505	13	城館跡	鎌倉・室町
10 人見館跡	1513	20	城館跡	鎌倉・室町
11 六十塚遺跡	1511			消滅
12 間部館跡	1514	21	城館跡	鎌倉・室町
13 右近館跡	1515	22	城館跡	鎌倉・室町
14 諏訪館跡	5177	64	城館跡	鎌倉・室町
15 藤井平館跡	5176	63	城館跡	鎌倉・室町
16 京ノ内館跡	5778	65	城館跡	鎌倉・室町

第2章 遺跡の位置と環境

井上廃寺跡は玉造町大字井上の北西寄り台地上に位置し、井上字白幡1257-2番地他に所在する。古来より古瓦が採集され、周知の遺跡として知られていた。(県番1495町番3)

遺跡の所在する玉造町は、県の南西部、梶無川で2分された石岡台地の南端部と行方台地の北部に位置し、南西側に霞ヶ浦が広がる。また、北は小川町、北東は鉢田町、東は北浦村、南は麻生町に隣接する。井上廃寺跡は行方台地の北西部に立地する。標高は31m前後、地目は畠地と道である。遺跡の立地する台地から南西側に霞ヶ浦や筑波山を望むことができ、環境の良い土地柄である。

玉造町内では、縁が丘廃寺跡、手賀廃寺跡、手賀長者屋敷、そして本遺跡を含め、古瓦の出土地が4か所知られている。いずれも発掘調査は行なわれていないため、古瓦出土地を寺院跡と結びつけるためには将来の発掘調査を待たねばならない。

『常陸風土記』では、行方郡は考徳天皇の白雉4年(653)に、茨城郡八里と那賀郡七里の計七百余戸を割いて建郡されたと記載されている。行方郡衙は、麻生町行方に存在したと推定され、郡衙と密接な関係をもつ古代寺院が井上の地に存在した可能性が考えられている。

遺跡をとりまく玉造町内は古くから生活に適しており奈良・平安時代以前の遺跡も数多く分布している。

先土器時代では井上山の神地区からは表採で柳葉尖頭器が出土している。現在のところ調査例がないため、遺跡の詳細については明らかではない。

縄文時代では梶無川や霞ヶ浦に臨んだ台地上や台地の縁辺部に遺跡が確認される。草創期や早期の遺跡は現在のところ確認されていないが、前期から晩期の遺跡は玉造町内に点在して確認される。特に、中期の土器を出土する遺跡が多くみられ、いずれも海水産の貝を主体とした貝塚がみられる。主な貝塚ではオチャク内貝塚で阿玉台・加曾利EⅠ～EⅢ式土器の出土がみられ、若海貝塚・打絶貝塚でも阿玉台・加曾利E式土器、藤井貝塚・本能寺貝塚からも加曾利E式土器の出土がみられる。

弥生時代では井上古墳群第4号墳からの出土と加茂荒内平遺跡に後期の土器片が若干出土した2例が知られているのみである。

古墳時代になると町内全域に古墳が分布する。沖洲古墳群、井上古墳群、鳥名木古墳群が形成される。主な古墳は4世紀末に築造されたといわれる前方後方墳である沖洲動使塚古墳、6世紀代になると初頭の頃の築造と考えられる馬形飾付き金銅製冠を出土した前方後円墳の三昧塚古墳、中頃の築造と考えられる横穴石室をもつ軌立貝式古墳の大日塚古墳より形象埴輪の狼が出土したことで知られている。

参考文献

『玉造町史』昭和60年　　『常陸風土記』　『茨城県史史料　古代』所収　昭和43年

第3章 遺跡の概観

井上廃寺跡は『茨城県史』原始古代編によると、井上神社一帯に古瓦の散布が見られ、礎石は神社境内に集められているという記載がある。現在でも推定寺域内の畠より格子の叩き痕が入った平瓦の破片が表採される。

出土瓦は、素弁縁单弁六葉花文の軒丸瓦と素文軒瓦が知られている。共に瓦の文様に簡略化が見受けられる。ここより出土した瓦について阿久津久氏が「井上廃寺跡古瓦考」1985で詳しく述べられている。特に、素弁縁单弁六葉花文の軒丸瓦に注目され、相模国分僧寺、同尼寺、高林寺遺跡、神野向遺跡出土の軒丸瓦と共に通するものがあると指摘されている。

さらにその他、常陸国分寺系の軒丸、軒平瓦の出土がみられ、9世紀前半に推定され、この時期に行方郡に伝えられたという可能性を述べられている。

以上が井上廃寺跡についての今日までの見解であった。

参考文献 『茨城県史』 原始古代編

『玉造町史』 昭和60年11月9日

阿久津久「井上廃寺跡古瓦考」大森信英先生還暦記念論文集『常陸風土記と考古学』1985



第4章 調査の概要

第1節 調査の方法

調査区は県道際の為、安全対策として麻生警察署に道路使用許可の申請を行ない、発掘作業を行なう8時30分～16時30分の間は片側通行の処置をとり、夜間は調査区の周囲に単管パイプとトロープで囲い、スズラン灯を設置した。

調査区内には第Ⅳ系国家座標を用い10mグリッドを設定した。グリッドの名称は北西隅を基点とし東西をアラビア数字、南北をアルファベットで呼称した。北西隅をA-1グリッドとし順次付していった。

遺構確認は耕作土下のローム層上面で行なった。

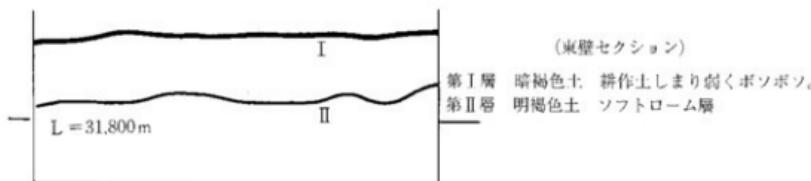
遺構は検出の状況に合わせセクションベルトを設定し掘り下げを行なった。検出された遺物は細片を除きすべてドットで位置を図面に記録した。

図面の記録については遺構は1/20で平板測量を行ない、出土遺物の位置と高さを記録した耕作土中や覆土上面に出土した遺物はグリッドごとに取り上げた。また、遺構配置図は1/200で平板測量で行なった。

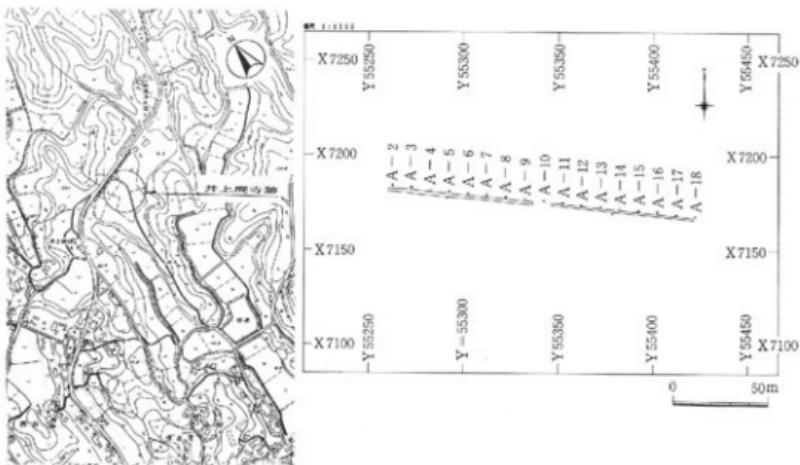
写真撮影は白黒35mm、カラースライド35mm、カラーネガティブ35mm、白黒プロニーー6×7を使用し、調査の状況に応じて撮影を実施した。

第2節 基本土層

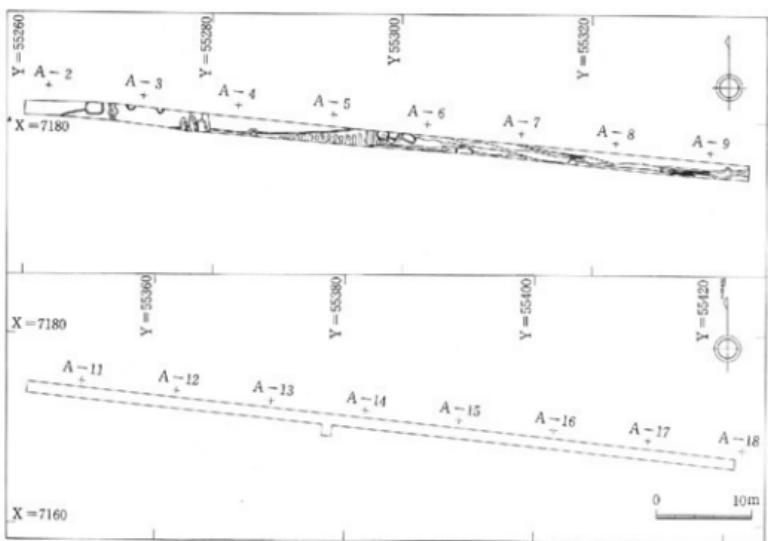
調査区は農地として利用されていたため、耕作土として搅乱され遺構確認面は耕作土下の地上ローム層上面で行なった。遺跡は上層の観察から洪積凹地に位置することが判明する。土層の観察は東側壁面で行なった。



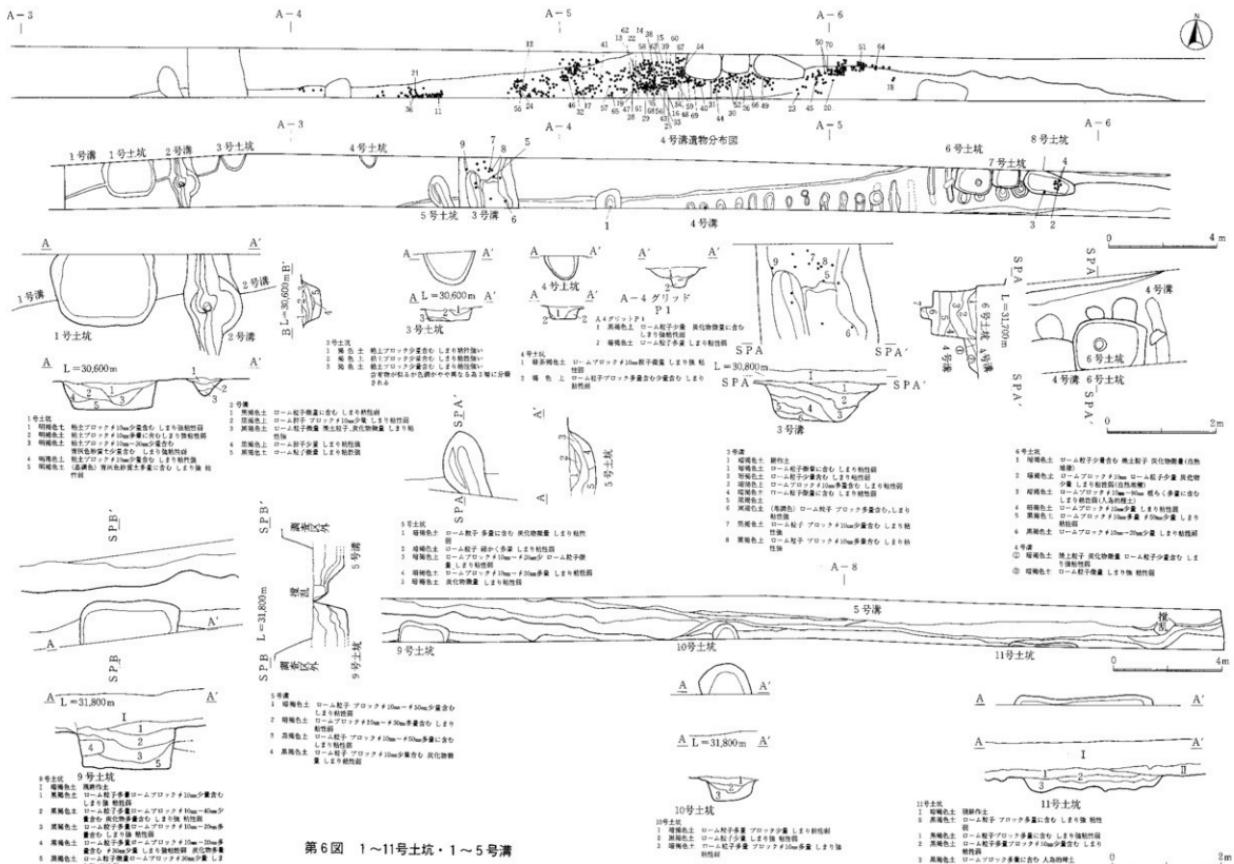
第3図 標準堆積土層図



第4図 調査範囲図



第5図 遺構範囲図



第6圖 1~11号土坑・1~5号溝

第5章 検出された遺構と遺物

第1節 遺構の概要

調査の結果、土坑11基、溝5条、小ピット3基が検出された。調査区が狭い範囲の為、形態規模が不明なものが多いため、寺院跡の可能性が考えられる遺構と遺物の検出がみられた。紙面に限りがあるため、遺構実測図は全体図として一括して掲載した。その為、図中では新旧関係、遺構に付設するものの見分けがつきにくいため、本文中で説明を行なう。

1. 土坑（第6図）

調査区外に延びているものがほとんどで平面形態が不明なものが多いため、規模は長軸、短軸が不明なものは検出された部分のみ記述した。

1号土坑

位置 A-2グリッドに位置する。／形態 平面形は調査区外に延びるため不明である。断面形は鍋底形。／規模 上幅1,76m・下幅1,45m。深さ0,49m。／覆土の状況 人為的埋土である。混入物と色調により明褐色土を基調に5層に分層される。遺構はローム層の下、白色粘土層まで掘り込まれる。／出土遺物 覆土上面より瓦片が2点出土。

2号土坑

位置 A-2グリッドに位置する。／形態 平面形は調査区外に延びるため不明である。断面形は鍋底形を呈する。／規模 上幅0,88m・下幅0,76m。深さ0,24m。／覆土の状況 自然堆積である。褐色土を基調に3層に分層される。／出土遺物 検出されなかった。

3号土坑

位置 A-3グリッドに位置する。／形態 平面形は調査区外に延びるため不明である。断面形は鍋底形を呈する。／規模 上幅0,63m・下幅0,48m。深さ0,22m。／覆土の状況 自然堆積である。暗褐色土と褐色土の合わせて2層に分層される。／出土遺物 検出されなかった。

4号土坑

位置 A-3グリッドに位置する。／形態 平面形は調査区外に延びるため不明である。断面形 鍋底形。／規模 上幅0,88m・下幅0,14m。深さ0,34m。／覆土の状況 自然堆積である。黒褐色土と暗褐色土の合わせて2層に分層される。／出土遺物 覆土中より瓦片が1点出土。

5号土坑

位置 A-4グリッドに位置する。／形態 平面形は調査区外に延びるため不明。断面鍋底形。／規模 長軸上幅1,22m+ α ・下幅0,98m+ α 。短軸上幅0,72m・下幅0,18m。深さ0,46m。／覆土の状況 自然堆積である。黒褐色土と暗褐色土の合わせて2層に分層される。／出土遺物 覆土中より瓦片が1点出土。

6号土坑

位置 A-5グリッドに位置する。／形態 平面形は方形 断面形は箱形。／規模 長軸上

幅1,86m・下幅1,12m。短軸上幅0,94m・下幅0,79m。深さ0,80m~1,04m。底面より柱痕状の掘り込みが検出径24cmを測る。覆土の観察では柱痕の検出は見られなかつたが柱穴の掘り方の可能性が考えられる。遺構は白色粘土層まで掘り込まれる。／覆土の状況 人為的埋土である暗褐色を基調に混入物の入り方で5層に分層される。／新旧関係 4号溝を切る。／出土遺物 覆土上面より瓦片が2点出土。

7号土坑

位置 A-5グリッドに位置する。／形態 平面形は調査区外に延びるため不明。断面形は箱形を呈する。／規模 上幅0,91m・下幅0,78m。深さ0,48m。／覆土の状況 人為的埋土である。明褐色土を基調に5層に分層される。／新旧関係 4号溝を切る。／出土遺物 覆土上面より瓦片が3点出土。

8号土坑

位置 A-5グリッドに位置する。／形態 平面形は隅丸長方形、断面形は箱形を呈する。／規模 長軸 上幅1,88m・下幅1,56m、深さ0,49m。短軸 上幅0,83m・下幅0,54m。／覆土の状況 人為的埋土である。混入物色調により明褐色土を基調に5層に分層される。／新旧関係 4号溝を切る。／出土遺物 覆土上面より瓦片が9点出土。

9号土坑

位置 A-6グリッドに位置する。／形態 平面形は調査区外に延びるため不明。断面形は箱形を呈する。／規模 上幅1,78m・下幅1,48m。深さ0,65m。／覆土の状況 人為的埋土である。混入物の入り方により暗褐色土を基調に5層に分層される。／新旧関係 5号溝を切る。／出土遺物 検出されなかつた。

10号土坑

位置 A-7グリッドに位置する。／形態 平面形は調査区外に延びるため不明。(梢円形?) 断面形は鍋底形を呈する。／規模 上幅0,94m・下幅0,64m。深さ0,39m。／覆土の状況 自然堆積である。暗褐色土2層、黒褐色土1層の合わせて3層に分層される。／新旧関係 5号溝を切る。／出土遺物 検出されなかつた。

11号土坑

位置 A-8グリッドに位置する。／形態 平面形 調査区外に延びるため不明。断面形鍋底形。／規模 上幅1,76m・下幅1,45m。深さ0,49m。／覆土の状況 1、2層が自然堆積で黒褐色土を基調に2層に分層される。以下3層目はロームブロックが粗く入る人為的埋土である。／出土遺物 検出されなかつた。

2. 溝 (第6図)

1号溝

A-2グリッド内より検出された。遺構は調査区外の南西と北東に延びる。北東から南東方向へ傾斜する。確認面より深さは4cm。断面形は皿状を呈する。底面は全体に亘って硬質化されている。一部分の検出のため、断定はできないが、道路跡の可能性が考えられる。遺構は1

号土坑に切られる。遺物は縄文土器の細片が覆土中より流れ込んだ状態で出土した。

2号溝

A-2グリッド内より検出された。遺構は調査区外の南北へ延びる。ほぼ中央部には円形の掘り込みが検出された。2号溝と切り合いは見られず、付随する遺構と考えられる。規模は円形の掘り込み部分は上幅1.08m、下幅0.14m、深さ42m。溝の部分は規模は上幅0.66m、幅0.18m、深さ0.32m、断面はU字型を呈する。遺物は瓦の細片が出土した。

3号溝

A-3グリッド内より検出された。調査区外の南北に延びる。断面は逆台形を呈する。規模は検出された部分で上幅：1.96m～2.19m、下幅：0.89m～1.35m、深さ0.38m～0.50m。南へ行くほど深くなる。西岸際に側溝状の細い溝が検出されている。覆土の観察で同時期の堆積であることが判明し、3号溝に付設された遺構であると考えられる。上幅0.36m～0.55m。下幅0.16m～0.22m。深さは溝底面より7cm前後の掘り込みである。遺物は覆土中より平瓦の破片が15点出土した。

4号溝

A-3グリッドからA-5グリッドの範囲で検出された。遺構は調査区外の南東より調査区の北東側へ延びる。規模は検出部分の全長が23.8m、幅は上幅：1.96m～2.19m、下幅：0.89m～1.35m、深さ0.38m～0.50m。地形に合わせ北東より南西側へ傾斜している。底面は良く踏み固められている。また底面より隅丸の長方形を呈する窪み状の掘り込みが約30cm～40cm間隔ではほぼ均等に検出されている。規模は長さ1.28m、最大幅0.46m、深さ6cmを測る。新旧関係は6、7、8号土坑と5号溝に切られる。覆土の状況は自然堆積である。暗褐色土を基調に2層に分層される。遺物は平瓦を主体とした瓦片が細かく碎けた状態で813点出土した。隅丸方形を呈する窪みのなかに人为的に平瓦の破片を敷きつめたかのように検出された部分も見られた。その他須恵器、灰釉陶器の破片が覆土中より若干出土した。

5号溝

A-5グリッドからA-9グリッドの範囲で検出された。遺構は調査区外の北西と北東側へ延びる。現存する旧道の方向と一致する。規模は検出部分では調査区外へ延びるため、全長、幅共に不明である。検出された部分の長さは25.63m、最大幅0.81m+α。深さ0.31m～0.56m。地形に合わせ北東より南西側へ傾斜している。底面は良く踏み固められている。覆土の状況は確認面より上層は人为的な盛り土である。盛り土中は碎石を混入している。本遺構の上にそのまま近年まで現在の県道が出来るまで道路として使用された痕跡であることが判明した。確認面より下の覆土は自然堆積である。遺構内は遺物の検出は見られなかった。

2. 出土遺物

遺物はビット1、8号土坑、3号溝、4号溝の覆土中より出土した。以下遺構別にまとめた。

8号土坑（第7図1）

土師器壺の破片が1点覆土より出土。復元口径12.1cm、調整は口縁部内外横ナデ、底部内面



第7図 8号土坑・3号溝4号溝出土遺物(1)

ナデ、外面ヘラケズリ、胎土は砂粒、焼成は良好、色調は橙褐色である。

3号溝（第7図 2~9）

覆土中より8点、瓦片が出土した。すべて凸面に格子目の叩き痕をもつ平瓦である。凹面には布目圧痕とさらに模骨痕が認められる。桶巻き造りである。4は交互打ちの技法が認められる。それぞれ胎土は砂粒を含み、焼成は良好、5、7、9が外面を黒く焼く技法である。色調は1は淡黒褐色、4、6、8が灰褐色である。

4号溝（第7図10~14 第8図~第11図）

覆土中より瓦片が合計813点出土した。種類は軒丸瓦、軒半瓦、丸瓦、半瓦、敷半瓦で、半瓦が主体として出土している。細片がほとんどで、完形になるものはなかった。他に須恵器壺高台付の破片、灰釉陶器の細片、鉄滓がそれぞれ1点ずつ出土した。

10~14は出土量が極めて少ないものを集めた。10は須恵器壺頭部の破片である。外面に櫛描き波状文が施され沈線によって区画される。胎土は長石、砂粒を含む。焼成は還元炎、良好。色調暗灰色である。11は長頸壺の底部の破片である。12は常滑系の壺の口縁部の破片である。口縁は折り返し二重口縁で、外面に沈線を巡らせる。頭部には波状沈線を施す。13は銀鉄滓である。径6.2cm、重さ180g。14は平瓦の破片である。凸面に須恵器の技法と同一の平行叩きを施す。凹面には布目圧痕を残す。また、模骨痕がわずかに認められる。桶巻き造りである。1点のみの出土である。次に掲載する遺物は本遺構の出土した主体となる瓦類である。紙面に限りがあるため種類別に、胎土、焼成、色調、工具、時期別に代表的なものを分類し掲載した。

軒丸瓦（第8図 15~23）

細片のみの出土である。15~23は瓦当の破片である。文様は蓮華文系の1種類ですべて単弁縁素弁6葉蓮華文である。瓦当裏面に布目圧痕がみられる。胎土は砂粒を含み。焼成は還元炎に分類される。色調は灰白色が18,20,21である。灰褐色が15,16,17,19で表面だけ黒色を呈し中は灰白色のものが22,23である。22は中房の破片である。蓮子は1+4である。圓線がわずかに認められる。色調は表面だけ黒色を呈し中は灰白色を呈する。

軒平瓦（第8図 24~26）

24~26は軒平瓦の破片である。瓦当面は素文である。凹面には布目圧痕を残す。24,25は凹面に格子目の叩きを施すもの。胎土は砂粒を含み、焼成は還元炎である。色調は24は黄橙色25は灰褐色である。26は凸面に繩目の叩きを施す。胎土は砂粒を含み、焼成は還元炎である。色調は褐色である。

丸瓦（第8図27~31）

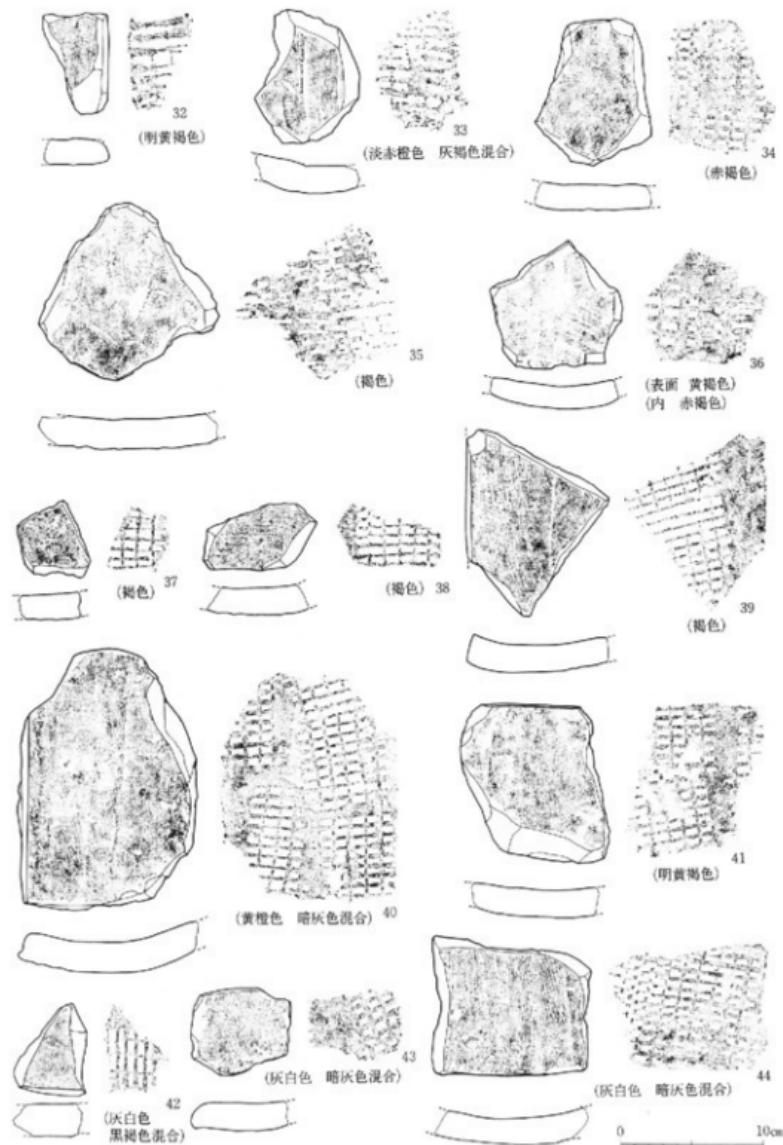
27~31は丸瓦の破片である。27は玉縁部の破片である。凹面側面は2回に亘りヘラケズリによる面取りがなされる。27~30は凹面はナデ、ヘラナデを施す。31は繩目の平行叩きのちナデ。

平瓦（第9図~第11図）

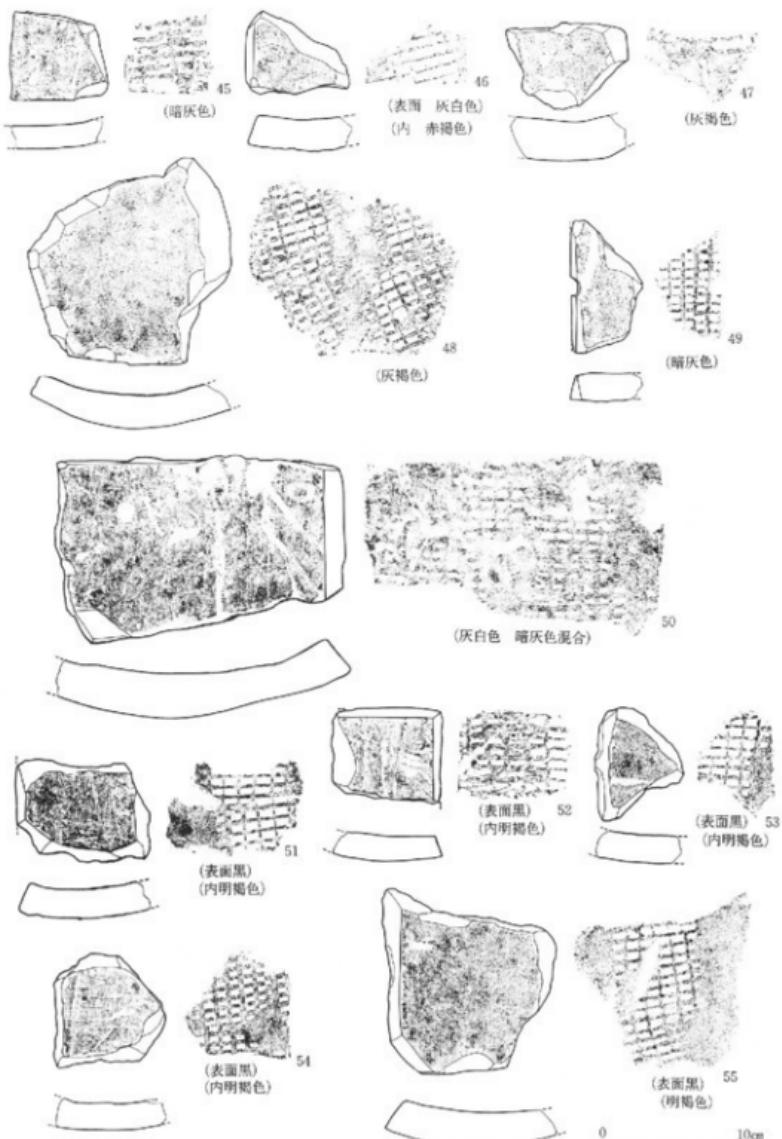
32~70は平瓦の破片である。凹面には布目圧痕を残し、模骨痕が認められる。桶巻き造りである。凸面に格子目の叩きを施すもの。68は有筋平行叩きを施す。64,65は短い繩の叩き、



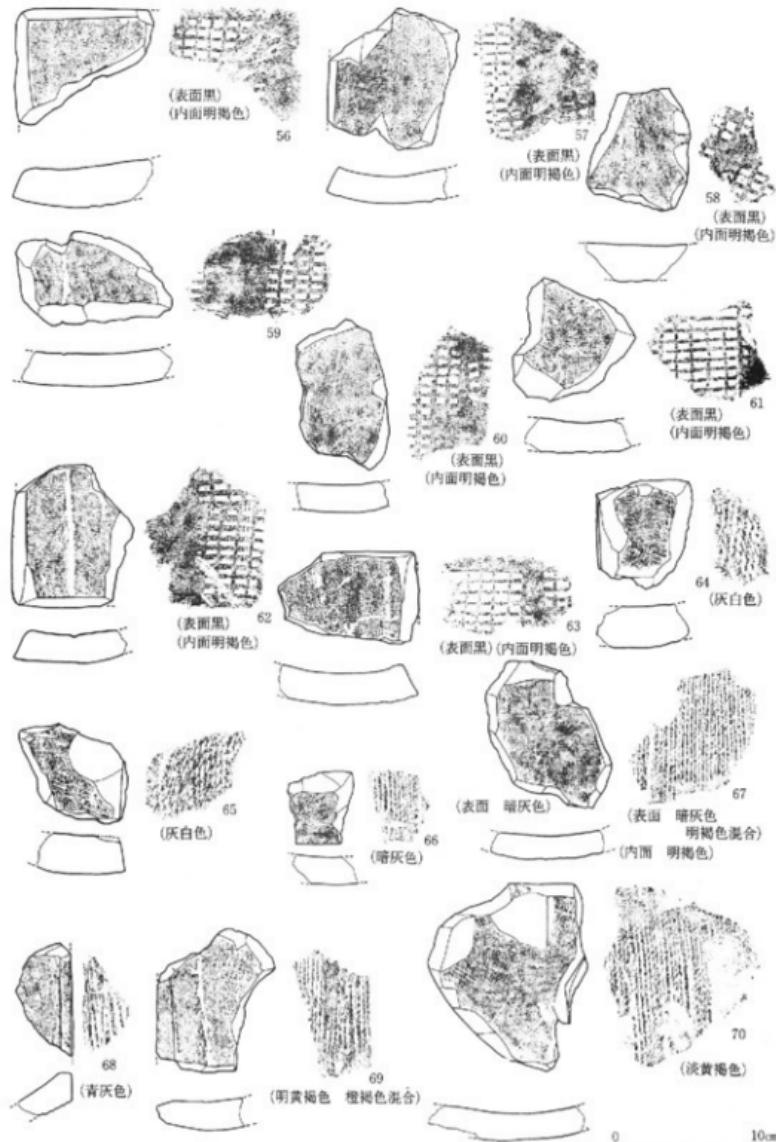
第8図 4号溝出土遺物(2)



第9図 4号溝出土遺物(3)



第10図 4号溝出土遺物 (4)



第11図 4号溝出土遺物 (5)

0 10cm

66, 67, 70は長い縄の叩きで補修瓦である。64, 65は桶巻き造り、67, 68は国分寺瓦で1枚造り。

第6章 まとめ

今回の調査は井上廃寺跡推定区域内の初の調査にあたる。調査の結果、農道を挟んだ東側の地区には遺構は検出されず、西側の地区にまとまって遺構、遺物が検出された。遺構は土坑4基、溝5条が検出された。狭い範囲内の調査で、遺構のほとんどが調査区外に延びているため形状、規模等が不明である。特に土坑は性格をつかむことができなかった。溝は他の遺跡との類例を比較検討して、寺域の境界と考えられる溝と道路状遺構の可能性が考えられるものもみられた。溝5条のうち遺物の検出された3号、4号溝について形状から類例を見いだすことができる為、類例を引き出し遺構別に性格について述べ、次に出土遺物についてまとめを述べる。

3号溝 調査区内を南北に貫通する形で検出された。断面は逆台形を呈し、寺院跡にみられる境界の溝に形状が似ている。調査範囲内では断定できないが、現況地形でみると調査区西側の先端から先は谷津になり寺域の西の境界溝の可能性が考えられる。

4号溝 溝は調査区の南東から北西にかけて調査区外に延びる形で検出された。また、5号溝に一部切られ、6、7、8、9号土坑に切られる。時期的には5号溝や土坑より古い遺構であると判明した。遺構内には隅丸長方形の窪みが規則的に並んで検出されている。この遺構の形状から類例をみていくと、武藏国分寺跡、府中市武藏国府関連遺跡、我孫子市施烏前遺跡、千葉市荒久遺跡、市原市草刈遺跡、船橋市夏見大塚遺跡、川崎市新作池ノ谷遺跡、岡山県奈義町山伏塚遺跡、福岡市有田遺跡等からみられる波板状凸凹圧痕面をもつ道路状遺構として報告されているものと類似する。同遺構については早川泉氏の論文に検出例を分析し、性格付けについて詳しく述べられている。将来の発掘調査の進展に伴いさらに遺構の性格が明らかになると思われる。

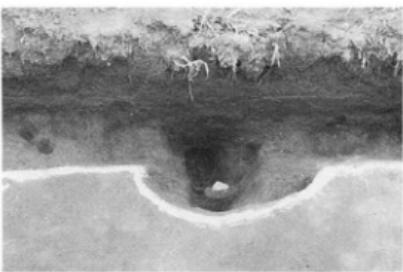
出土遺物 今回の調査では遺物は平瓦の破片が主で、須恵器壺、高台付塊、土師器蓋付壺の蓋灰釉陶器破片が若干量の出土である。3号溝、4号溝の遺構は同時期のものが出土している。瓦の時期は軒丸瓦は素軒縁単弁6葉蓮華文でほぼ1時期に納まり、8世紀前半に比定される。さらに焼成の違いで細分される可能性があると考えるが細片で出土量が少なく全容がわからないため時期の細分は不可能である。軒平瓦は格子目の叩き、繩目叩きの2期に分かれる。平瓦はさらに格子目の叩き、短い縄目の叩き、長い縄目の叩きの3期に分かれる。年代観を与えていくと、格子目の叩きのものが8世紀前半、この時期に須恵器工人の技法にみられる有節平行叩きのものが同時期に入る。短い縄目のものは桶巻き造りで8世紀中頃から後半の補修瓦である。長い縄目の叩きが国分寺瓦9世紀前半の所産である。さらに格子目の叩きは工具と胎土、焼成、色調で細分化され、時間差が考えられるが、伴う軒丸瓦の出土がわずかなため、細分は将来の調査を待たねばならない。

写 真 図 版





① 1号土坑 検出状況 南→



② 5号土坑 検出状況 北→



③ 6号土坑 検出状況 西→



④ 3号溝 遺物出土状況 北→



⑤ 4号溝 遺物出土状況 北東→



⑥ 同 遺物出土状況 (A-5、6G) 北→



⑦ 4号溝 検出状況 (A-5 G) 北→



⑧ 4号溝 検出状況 (A-4 G) 北→

写真図版 3

4号溝出土遺物(1)

軒丸瓦



17



19



15



16



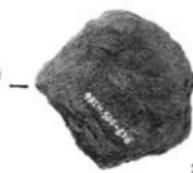
18



23



20



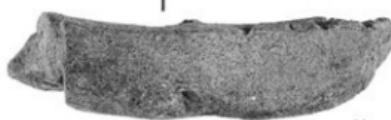
22



—



軒丸瓦



24



14

平瓦



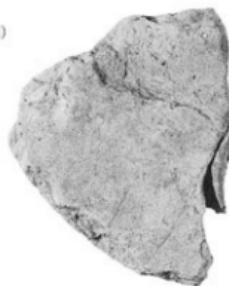
平瓦
(格子目)



40



(縄目)



—



70



64



11

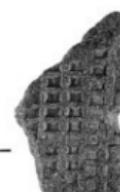


10



12

写真図版 5 4号溝出土遺物(3)



平瓦 49



31



29



平瓦 62

参考文献

- 『玉造町史』 昭和63年
- 『国分寺市史』 上巻 昭和61年
- 早川泉 「古代道路遺構に残された圧痕」
—波板状凸凹面の性格について— 『東京考古』 9 1991
- 富永樹之 「奈良平安時代の幹道と支道、生活道」『青山考古』第10号 1992.5
- 飯田光晴 「埼玉県東の上遺跡の道路遺構」 『季刊 考古学』第46号 1994.2
- 佐原 貞 「平瓦桶巻き造り」 『考古学雑誌』58巻2号 昭和47年9月
- 阿久津久 「井上廃寺古瓦考」
大森信英先生還暦記念論文集『常陸國風土記と考古学』雄山閣出版1985.9
- 黒沢彰哉 「常陸における国分寺瓦の研究Ⅱ」 『婆良岐考古』 第9号 1987.4
「常陸における古代寺院の一考察」
—各郡の造瓦活動を中心として— 『婆良岐考古』 第10号 1988.4
- 『瓦』 森 郁夫著 考古学ライブラリー43 ニュー・サイエンス社 昭和61年1月
- 『國鑑瓦屋根』 岛井利弘著 理工学社 1977.6.30
- 『常陸國新治郡上代遺跡の研究』 高井悌三郎 1944年
- 『茨城廃寺跡』 I・II・III 石岡市教育委員会 1980, 1981, 1982年
- 『特別史跡 常陸国分寺跡発掘調査報告書』
—道路排水溝に伴う調査— 山武考古学研究所 1989.3
- 『結城廃寺』 第1次調査概報 結城市文化財調査報告書第4集 結城市教育委員会 1989

井上廃寺跡

—県道山田玉造線歩道新設に伴う発掘調査—

印刷 平成6年3月31日

発行 平成6年3月31日

編集 山武考古学研究所

発行 玉造町教育委員会

印刷所 株式会社文化総合企画

重0476-93-0593

THE INOUE HAIJI
ARCHAEOLOGICAL EXCAVATION REPORT

CONTENTS

Preface	
Introductory notes	
Legend	
Abstract	
1 .Background of the Research and Proceeding of the Research	1
1 .Background of the Research	1
2 .Proceeding of the Research	1
2 .Geography and History of the Region around the Site.....	3
3 .A General Survey of the Site.....	4
4 .An Outline of the Research.....	5
1 .Method of the Research	5
2 .Stratification of the Site	5
5 .Ruins and Remains	9
1 .An Outline of the Ruins	9
1)Pits	9
2)Ditches	11
6 .Conclusion	16
Plates	
English Contents	